



Title	王充における道德の实践
Author(s)	滝野, 邦雄
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1985, 19, p. 17-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

王充における道徳の実践

滝野邦雄

中国思想において、「知る」ということの主要な意味は、道徳的な問題を知ること、すなわち、道徳的な価値や人間の行為の善悪を知ることである。また中国人は、知ることと道徳的な行為とが不可分の状態であると考えていた。したがって、中国思想における認識論を考える場合、ものをいかにして知るか、ということのみでなく、知ることと道徳的な実践とがどのように一致するのか、ということまでを明らかにする必要がある。

そこで、本稿では後漢の王充をとりあげ、王充において知るといふことは、どういうことであったのか。また、知るといふことから、なぜ道徳的意識が導き出されてきたのか。そして、どのようにして実践できるのか、ということを検討することにする。

一 人間の認識能力

周知のように、王充は気が集まって万物や人間が形成され、死とともにまた気に散じてしまうと考えていた。だから、万物と人間とは共通の要素である気から成り立っていて、万物と人間、さらには宇宙全体が一体となってい

ると考えた。

このように、元氣（万物に変化する元の氣）から万物が生じるとき、そこに性や命と同じく、神があたえられる。人神氣を用て生ず。（『論衡』論死篇。以下『論衡』からの引用は、篇名のみを記す。）では、この神は人間の中でどのような作用をするのだろうか。王充は、次のようにいう。

それ人は神を用いて思慮す。思慮決せず、故に著龜に問う。……それ思慮は、己れの神なり。……一身の神、胸中にありて思慮をなす。（卜筮篇）

すなわち、人間にあたえられた神を「思慮するもの」（思慮する働きをするもの）と考えたのである。

すると、この「思慮するもの」である人間の神は、物とどのように関わり認識するのであろうか。王充は、次のようにいう。

人 癡狂の病あり。（しかし）もし其の物の然るを知りてこれを理むれば、病すなわち愈ゆ。（論死篇）

「癡狂の病」にかかると「路上で歌い泣き、東西もわからず、寒暑も悟らず、自分の病気にも気づかず、空腹や満腹も解さない」（率性篇）という呆然とした状態になる。しかし、このような状態であっても「思慮するもの」によってそれを分析し、それに対処することによっておさめることができるというのである。

したがって、王充はいう。

それ論の、精を留め意を澄まさず、苟しくも外効をもって事の是非を立て、聞見を外に信じ、内に詮訂せざるは、これ耳目を用うるの論にして、心意をもって議せざるなり。それ耳目をもって論ずれば、すなわち虚象をもつて言をなす。虚象もて効あれば、すなわち実事をもつて非となす。この故に是非なる者は、徒だに耳目の

みならず、必ず心意を開く。墨〔家〕の議は心をもって物を原もとねず。苟しくも聞見を信ずれば、すなわち効驗章明なりと雖も、なお実を失すとす。(薄葬篇)

このように、人間に備わる「思慮するもの」の重要性を説く。耳目などによって経験的にあたえられるものだけでは、「実を失す」のである。だから、王充の認識は単に経験的であるとはいえない。必ず「思慮するもの」を用いてものを知らねばならないとされているからである。

このような、天があたえたものの、人間の側に存在する「思慮するもの」は、それでは逆に、天に対してそれを知ることが可能であろうか。

二 王充における天の意味

王充は唯物論者であるとされる。その根拠として、よく引用されるのは、次のような文章である。

それ天は体なり、地と異なるなし。もろもろの体ある者は、耳みな首につく。体と耳と殊なるもの、いまだこれあらざるなり。天の人を去るは、高さ数万里。耳をして天につけ、数万里の語を聴かしむるも、聞く能わざるなり。……況んや天と人と体を異にし、音の人と殊なるをや。……天をして体ならしむか。耳高くして、人の言を聞く能わず。天をして気ならしむか。気は雲煙の若くんば、安くんぞよく人の辞を聴かん。(変虚篇)

ここから、王充が天の感覺性、有意志性、神性を否定し、天の物質性をはっきりと規定したとの結論を導く。

(侯外廬主編『中国思想通史』第二卷、二七八頁)

私はこうした立場を全面的に否定するものではない。

時代は下るが、南宋の朱熹は経伝に見える天の字の意味を問われたのに対して、

蒼蒼と説く者あり、主宰と説く者あり、単に理と訓ずる時あり。(『朱子語類』卷一 簡)

と答えた。経伝に見える天には三つの意味、すなわち、物質的な体をあらわす蒼蒼の天、万物の主宰者を意味する天、理という概念と同義語である天、の三者があるというのである。こうした朱熹の考えは、王充のいう天を理解する場合にも有効であろう。

王充は、天の動きは人間の動きと同じく、有為的、有意志的なものであるとする説を批判して、次のようにいう。天の動行するや、氣を施すなり。体動けば、氣すなわち出で、物すなわち生ず。なお人 氣を動かすがごとく、体うごいて氣すなわち出で、子も亦た生まるるなり。それ人の氣を施すや、もつて子を生むを欲するにあらず、氣施され子おのずから生まるるなり。天動いてもつて物を生ずるを欲せずして、物おのずから生ず。此れすなわち自然なり。氣を施すは、物を為るを欲せずして、物おのずから為す。此れすなわち無為なり。(自然篇)

天は、なにかを生もうとするような有意志的なものではなくて、氣に運動を与えるにすぎない。その動行は「自然」であり、「無為」なのである。しかし、存在するだけで何事も行なわないというのではない。存在して、万物に氣を施す主体となり、万物を生ずる中心となるものである。それは、たとえば次のようである。

人・物は天に繫がれ、天〔は〕人・物の主たるなり。(變動篇)

これは、人間の行為が天に感応して、災異が起るということを批判しての意見であり、人格的な意味での主宰者の批判を行っている。しかし、この「人・物の主」ということからいえば、天は、人や物を統べるものである。すると、王充は、万物の統一者としての天という存在は認めていたといえる。

このように考えると、王充は天の意味を多義的に用いていたと言えよう。しかし、王充はその多義性を区別して使用せず、すべて天という同じ語で表現していたのである。私は、王充の把握する天を考えると、物質的な天の性格だけを見るのではなしに、統一者的な天の性格として把握している点も考慮にいれなければならないと思う。

要するに、天をただ単に物質的なものとして見るならば、一で述べたように「思慮するもの」は「物としての天」を認識することができる。それなら話は簡単になるが、天のもう一つの性格、すなわち「統一者としての天」は単なる物ではないので、はたして人間の「思慮するもの」で把握できるであろうか。そこで、王充は統一者的な天をどのように知ることができるとしたのか、という問題を考えてみることにする。

三 天の知り方

天の万物に対する攝理性は、人の知ることのできないものである。人が知ることのできるのは、万物の生成のよくな所与的な現象のみである。人は「天 動いて物を生ずるを欲せずして、物おのずから生ず」という形でしか、すなわち自然無為としてしか、天の攝理性を認識できないのである。人間は天の統一者的性格を、おの自ずから（ひとりで）そのようになるものとしてしか知ることができないのである。

そこで、王充は人間が知ることのできる、こうした所与的な現象を「自然無為は、天の道なり」（初稟篇）というふうに天道とよんだ。

この王充のいう道（天道）は、『論語』の中で、「天なにをか言わんや。四時行われ、百物生ず。天なにをか言わんや。四時行われ、百物生ず。天なにをか言わんや」（陽貨篇）とされるものに通ずる。王充は、この『論語』のこと

ばを次のように説く。

孔子曰く「天なにを言わんや。四時行われ、百物生ず」と。天言わざれば、すなわちまた人の言を聴かず。

天道は自然無為なり。(卜筮篇)

また、王充はこのことをふまえて言う。

天道は無為なり、故に春は生ずるをなさず。夏は長ずるをなさず。秋は成するをなさず。冬は蔵するをなさず。陽気おのずから起りて、物おのずから成蔵す。(自然篇)

また、王充より時代は前になるが、前漢の董仲舒は、『春秋繁露』の中で、

天の道は、春暖かくしてもつて生じ、夏暑くしてもつて養い、秋清にしてもつて殺し、冬寒くしてもつて蔵す。

(四時之副篇)

と天道を説明する。

王充にあつても、天道は四時の運行だとか、万物の生の営みという、現実世界の現象性としてとらえられていた。すると、人間は統一者としての天に対して、認識することを放棄し、

天と人とは道を同じくし、好悪〔は〕心を均しくす。(奇怪篇)

というほかはない。すなわち、ただ単に天の行為(天道)と人間の行為(人道)との合致を言う以外にはないのである。そうすることによって人間は天の攝理とともに動くことになり、天の行為に合致することができる可能性が出てくる。「好悪〔は〕心を均しく」なり、天の道徳的な価値判断と合致させてゆける道が開かれるのである。

それでは、人間はだれでも天の行為に合致することができるのであろうか。

四 聖人による道德の実践

王充にとって人間が善の行為を行うときは、統一者の行為としての天道（自然無為）に合致しているかどうか、道德的な価値判断の基準となる。王充は、それを次のようにも述べている。

人道は善を善し、悪を悪む。善に施すには賞をもつてし、悪に加うるには罪をもつてす。天道よろしく然るべし。（謹告篇）

道德仁義は、天の道なり。戦栗恐懼は、天の心なり。道を廢し徳を滅するは、天の道を賤しむ。嶮隘もて恣睢するは、天の意に悖る。（弁崇篇）

王充は、こうした天道に合致する人道の体現者として、聖人を設定する。

至徳純渥の人は、天の気を稟くること多し、故によく天に則り自然無為なり。気を稟くること薄少なれば、道徳に遵わず、天地に似ず、故に不肖と曰う。（自然篇）

これは、徳のすぐれた人は、天道（自然無為）に自己の行為を合致できるが、そうでない人は、天道（＝道德）にしたがわず、天地の運行に行為が合致しない、ということである。聖人のそうした卓越性を王充はいろいろな角度から述べている。たとえば、次の文のようにである。

上天の心、聖人の胸にあり、その謹告するに及びては、聖人の口にあり、聖人の言を信ぜず、かえって災異の気を然りとし、上天の意を求索するは、何ぞそれ遠きや。（謹告篇）

さて、王充は聖人以外の人間について、

人の善悪は、共に元氣を一にす。「しかし」氣に少多あり。故に性に賢愚あり。(率性篇)

といい、氣の多少による賢愚の差を認める。さらに、「善人は道に順う。悪人は天に違う」(福虚篇)といい、聖人とその他の者とを区別する。聖人は容易に天道にのつとることができるのである。

では聖人以外の者は、どうすればよいのであろうか。前に引いた「譴告篇」の文に示されているように、ただ「聖人の言」を天の意志として聞くのみであるのか。その点を明らかにするために、王充の自然無為觀をもう一度見てみることにする。

五 聖人以外の人間の道德の實踐

道家の思想では、作爲的なものを否定し、自然無為を尊ぶ。王充もこうした考えにそつて、このような自然無為を重視する。しかし、王充はその反面、こうした自然無為だけでは不完全であり、可能な範囲においては、それに補助を加えねばならないと考えた。たとえば、次のようにである。

然れども自然と雖も、またすべからく補助を為すことあるべし。耒耜もて耕耘し、春によりて播種する者は、人これを為すなり。「しかし」穀の地に入るに及びてや、日夜長大せしむる「ということ」は、人なす能わざるなり。「にもかかわらず」或いはこれをなすは、敗の道なり。宋人にその苗の長ぜざるを闕うる者あり。就きてこれを堰げば、明日枯死す。それ自然に「対して無理に」為せんと欲する者は、宋人の徒なり。(自然篇)

このように、自然を尊ぶだけでは不充分であつて、そこに一定限界の補助的人為を加えねばならないという考えは、王充だけの特別のものではない。広く儒家の中に見られる考えである。

故に玉琢かざれば、器を成さず。人学ばざれば、道を知らず。……是をもつて自然の性ありと雖も、必ず師傅を立つ。(『白虎通』辟雍篇)

とあるのが、その例である。すると、王充の自然無為観の中には、儒家的な考えが潜んでいるといえよう。

それでは、こうした道家の立場にありながら、儒家的な考えも見られる王充の自然無為観は、どこから出てきたのであろうか。

そもそも王充の人間観からすると、世の中が聖人だけであるなら、もしくは、天からあたえられた性が善だけであるなら、自己に賦与された性をつくして、天道にしたがえばよい。だが現実には、すべてが聖人であり、性が善の人間ばかりではない。そこで、そうでない人間のために、王充は礼によって天道に合致することを説く。

富貴はみな人の欲するところなり。君子の行ないありと雖も、なお飢渴の情あるがごとし。(「しかし」君子は耐

く礼をもつて情を防ぎ、義をもつて欲を割く。故に道に循うをう。道に循えばすなわち禍なし。(答佞篇)そして、そのため王充は学問を重視する。

故にそれ学は情に反して性を治め、材を尽くして徳を成すゆえんなり。(量知篇)

たとえ、性が悪である人間にも、

今かの性悪の人……教導するに学をもつてし、漸漬(『漢書』董仲舒伝の顔師古の注では「漸」も「漬」も浸潤の意)するに徳をもつてすれば、またまさに日に仁義の操あらんとす。(率性篇)

と述べるように、教化の意義を認める。これは実は、道家的な無為自然観と対立する考えである。なぜなら、道家においては学問、教化は有為のものとして逆説的に否定されるからである。

自然無為の中にも一定範囲の有為の有用性を認めた王充は、さらに次のようにいう。

天道（「天」字は、「夫」^{そと}字ではないかとする黄暉の説がある。仮にこの説に従えば、「道」は方法といった意味になろう）に真偽あり、真なる者は固よりおのずから天と相い応ず。偽なる者は人（が）知巧を加え、亦た真なる者ともって異なるなきなり。（率性篇）

この場合の「偽」とは、もちろん「知巧を加う」という作為の意味である。また、引用した率性篇の全体の文意では技術的作為ということであるが、そこから拡大して広く一般的な方法とも解した。

すると、王充は天に合致する方法として、二とおりあると考えていたといえよう。一つは、「固よりおのずから」合致する「真」なる方法。これは、聖人の場合に可能であろう。二つめは、「知巧を加えて」合致するという「偽（有為）」の方法。これは、人間の努力による方法であることを示している。このように、王充は天道に合致する行為（人道）として、人間側の努力によってあるいは可能な方法を考えていたのではないだろうか。

以上、一―五までの所説を要約すると、次のようになる。

人間は、天からあたえられた「思慮するもの」を用いて、ものを知ることができると王充は考えた。

人間にこうした能力をあたえる天は、物質的性格を有するだけでなく、万物の統一者、万物を生み出す主動因の性格をも有する。

このような統一者的な天の攝理性は、人間にとって理解できないものである。しかしながら、天の攝理性の反映した天の動行は、「無為自然」として知ることができると。そこで、天の動行に自分の行為を合致することによって、

天の攝理を知ることが可能であると考えた。すると、世界の秩序に自分の行為を合致させるのであるから、そこには当然命令的規範的な意味あい、「くすべし」という意識があらわれてくる。

王充は、このような天のうごきに合致する行為を実践できる人間として、聖人を設定する。聖人はあるがままで実践できるのである。

だが、世の中は聖人のみではない。では、聖人以外の人間は、どうすればよいのだろうか。王充は、そうした人間は学問や知巧を加えて道徳的な行為を実践すればよいと考えていた。

(大学院後期課程学生)